

赤穂浪士はなぜ切腹させられたのか

—文治政治の時代における為政者としての武士のあり方—

大江 和彦

いわゆる「忠臣蔵」の話は、1701年の3月14日の江戸城松の廊下における刃傷事件に端を発し、1702年12月14日、江戸本所の吉良邸に赤穂浪士が討ち入り、吉良上野介義央の首を取ったという現実に起こった一連の事件を題材とした創作脚本である。戦乱という戦乱のない当時の社会では、まさに世を揺るがす大事件であった。当時より現在に至るまで、さまざまに脚色されながら、浄瑠璃・歌舞伎・映画・テレビドラマなどによって、多くの人々が見聞きした事件であり、過去から現在にかけて、民衆に大人気の脚本となった。まさに水戸黄門に勝るとも劣らない典型的な勧善懲悪のストーリーとなっている。しかし、この事件の時代背景や武士としての生き方を考慮に入れて別の面からこの事件を捉え直してみると、歴史理解における非常に重要な論理に気づくことができる。本論文では、将軍に真っ向から勝負を挑んだ赤穂浪士の死を主題とし、文治政治の時代における為政者としての武士のあり方を論理的に解明する。

Ⅰ. 問題の所在

中学校2年生に、「赤穂事件」「赤穂浪士の討ち入り」「忠臣蔵」とは何か、内容を聞いたことがある生徒はいるかと思うところ、手を挙げたのはわずか5%程度であった。高校生になるともう少しパーセンテージは上がるだろうが、実際のところ、中高生にとってあまり興味のないテーマなのかもしれない。むしろ、中高年の人々に人気があると思う方が自然かもしれないが、今の中高生も、いずれどこかでこの話に触れる機会があるはずである。

なぜ、いわゆる『忠臣蔵』はそれほど人気があるのだろうか。理由は明白である。吉良は悪、赤穂浪士は善であり、善が悪を懲らしめるという非常にわかりやすいストーリー設定となっているからである。いきさつはどうあれ、恨みを持ってこの世を去った旧主の墓の前に、さまざまな障害を乗り越えながら綿密な計画を立てて討ち入りを完遂した赤穂浪士が吉良上野介の首を亡き藩主の供える瞬間などは、涙無しには語れない場面である。自らの命を顧みず、耐え難きを耐え、しのび難きをしのいで目的を果たした赤穂浪士に対し、世間の人々は大きな拍手を以てその行動と意思を「忠義」として讃えているのであり、時代を超えてこの脚本が愛される最大の理由である。

しかし、この話を読めば読むほど、重要なことであるにもかかわらず、当たり前のように見過ごされていることがあまりにもたくさんある。これらの事象がおこる背景と理由・経過・結果を論理的に掘り下げてゆくことで、当時の武士社会のものの考え方がわかることになると考える。当時の武士の行動論理を理解するため、脚色され

た「忠臣蔵」の物語から客観的事実を抽出して歴史授業に構成する。

このことは、江戸時代における朝廷と幕府の関係、将軍・大名・旗本・藩士との関係を客観的に理解するための有効な方法となりうる。幕末における朝幕関係は、これらの社会関係の理解を前提とすればより深く理解できるはずである。

Ⅱ. いくつかの謎

赤穂事件には、いくつかの謎がある。

江戸城中で起こった刃傷事件に関しては、

- ①脇差しといえども、殿中においてそれを抜いた瞬間、切腹・改易は分かっているはずであるにもかかわらず、なぜ浅野は刀を抜いたのか。
- ②浅野には、それほどの深い(?)恨みが吉良に対して本当にあったのか。
- ③吉良が浅野をいじめたという話があるが、高家・御指南役という立場を利用して、一介の旗本に過ぎない吉良が大名である浅野を本当にいじめたのか。

赤穂浪士による討ち入り事件に関しては、

- ①赤穂浪士は、なぜ吉良邸に討ち入ったのか。また、赤穂浪士を率いて討ち入った大石内蔵助が掲げた「主君の仇」ということばにはどのような論理があったのか。
- ②民衆はなぜこの行為を忠義と褒め称えたのか。
- ③50人もの武士が一人の老人宅を明け方に強襲し、首を取ったことは一種のテロ行為ではないのか。
- ④赤穂浪士は討ち入り後、自分たちが忠義の士であると信じており、仕官の道も開けると考えていたら

いが、切腹を命じられておいおいと泣き出す浪士もいたという。なぜ彼らは泣くのか。

よくテレビ等で目にする「忠臣蔵」のストーリー・脚本には、当然脚色がある。できるだけその脚色を取り除き、客観的に状況を分析してみると、数え切れないほどの謎が存在するのである。

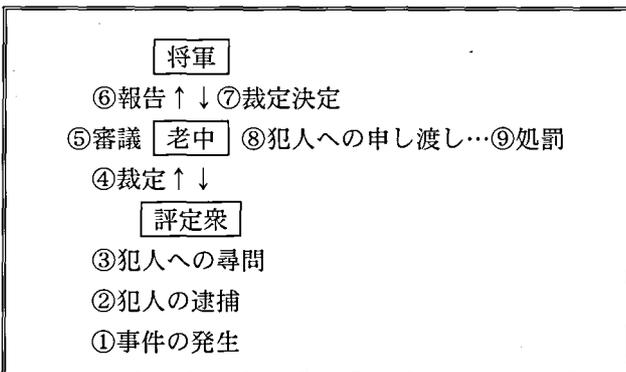
この事件が起こった歴史的背景を考慮しながら、これらの謎を解き明かすことを通じて、論理的に事件を検証する。生徒は、この過程を追体験することで、江戸時代の社会の仕組みや為政者のものの考え方をより効果的に理解できると考える。

Ⅲ. 「喧嘩両成敗」と將軍の自己矛盾

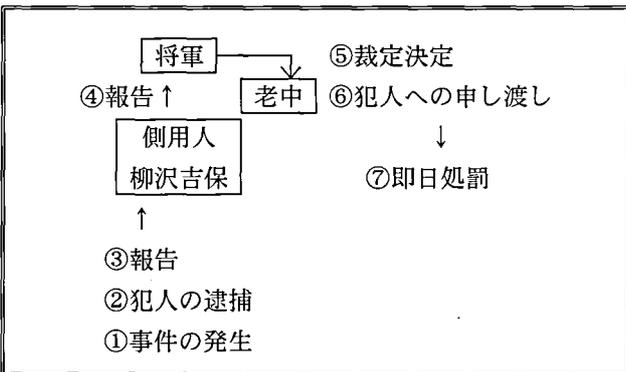
(1) 事件の裁定までの道筋の比較

下の(a)・(b)の図は、事件の発生から処罰までの本来の道筋と赤穂事件の際の道筋である。

(a) 事件の発生から処罰までの本来の道筋



(b) 赤穂事件の道筋



最大の相違点は、赤穂事件の道筋には、犯人への尋問、評定衆の裁定、老中の審議の3点がないことであり、このことを原因として、浅野と吉良との間にどんな対立があったかが明らかにされないままに一方的な処罰が行われてしまったのである。

当時の五代將軍徳川綱吉は、文治政治の推進者であった。慶安の変以来浪人大量発生の原因となった改易を中心とした武断政治を改め、大名や民衆が幕府への反抗心

を捨て、彼らにとって目上の存在である幕府や將軍を尊敬するよう朱子学を用いて文治政治を進めている最中であつた。綱吉自身も文治政治実践の一環として、子の親に対する孝養として、生母桂昌院に従一位叙位の動きを朝廷に働きかけていたのであり、この事件の発生は、時期的に幕府のイメージを一方向的にダウンさせ、叙位の動きに大きな障害となる可能性があつた。そのため綱吉は怒りにまかせて本来の手続きを経ず、一方的な裁定を下してしまつたと考えられる。

戦国時代、喧嘩両成敗という原則が存在した。いうまでもなくこの原則は、理由の如何を問わず喧嘩に及んだ者を両者とも処罰するという考え方である。浅野の旧臣(赤穂浪士)たちは、この点に大きな不満を持っていたと考えられる。要するに幕府の裁定に納得いかないのである。ゆえに、「幕府の裁定が誤っているのだから吉良は死んでもよい」という討ち入りの論理に発展する。しかも自分たちの行為は、亡き藩主の無念を晴らしたという儒教道徳上何ら問題のない忠義を一途に貫いた行為であると信じているのである。

討ち入り後の赤穂浪士の処分については、儒学者の間でも幕閣の間でも助命論・切腹論・磔獄門論などが噴出し、評定衆に至っては、

- ① 討ち入りは徒党とはいえない
- ② 赤穂浪士は真の忠義者であるからいずれ赦免するべきである
- ③ 吉良家の家臣で戦わなかった者は斬罪にするべき
- ④ 上杉綱憲(出羽米沢藩藩主で吉良上野介義央の実子。

討ち入りがあつた吉良屋敷の近くに江戸屋敷があつた)は父の危機に何もしなかつたので、領地を召上げて改易にすべきである

といった、極端に浅野側に立った意見書を綱吉に提出しているのである。

当然徳川綱吉は対応に苦慮する。もし彼らを助命すれば、1年前の刃傷事件に対して行つた、喧嘩両成敗を無視した裁定を誤りだと認めることになり、將軍としてはそれは認められない。彼らを斬罪に処せば、自分の意思を貫くことになるが、幕閣の分裂を招くことになりかねない。最終的に綱吉が行つた裁定は、「全員切腹」であつた。彼らの武士としてのプライドを傷つけることなく幕閣らの批判も最小限に抑えながら事件のソフトランディングをめざしたのであつた。言い換えれば、自己矛盾が生じた綱吉が自分や周りを納得させられる方法は、「切腹」以外あり得なかつたのである。

ただ、泰平の世である江戸中期に起こつたこの事件については、戦国時代から存在した「喧嘩両成敗」の原則をそのまま(理由の如何を問わず両者を罰すること)適用するかどうか、儒教的にも大きな問題があつたことは

確かであり、追い腹（殉死）の風習とともに、長い間続いた武士の時代のさまざまな価値観の変化の一面として捉えることができるのである。

つまり、「赤穂浪士はなぜ切腹させられたのか」とい

う主題に対する答えは、武士階層の最高権力者としての将軍に対し、多様な価値観の変化の中で為政者としての武士のあり方を求める過程であったと理解することができる。

IV. 授業構成案

① 単元名 江戸中期の社会（5時間）

- ② 単元計画
- 1 慶安事件と幕府政治の転換（幕府はなぜ政治の方針を転換したのか）（1時間）
 - 2 赤穂事件と為政者としての武士①（赤穂事件はなぜ起こったのか）（1時間）※
赤穂事件と為政者としての武士②（赤穂浪士はなぜ切腹させられたのか）（1時間）※
 - 3 江戸時代の三大改革（江戸幕府の改革はなぜ行われたのか）（1時間）
江戸幕府の改革と雄藩の改革（幕府の改革と雄藩の改革はどう異なるか）（1時間）

③目標

赤穂事件と為政者としての武士①

◎赤穂事件は、浅野内匠頭長矩と五代将軍徳川綱吉の直情的性格を原因として起こったことを理解する

○浅野長矩と吉良義央の間にあったといわれる対立は、史実としては立証できないものが多く、幕府が意図的に事件の原因を隠した可能性も含めて、真相は謎に包まれていることを理解する。

○浅野長矩は、冷静に考えればできないはずの抜刀を江戸城中で行ってしまうほどの直情的人物であったことを理解する。

○五代将軍徳川綱吉の裁定による浅野に対する即日切腹の命令は極めて異例であり、幕府の朝廷に対する、また、子の母に対する尊敬心の現れとしての文治政治の裏返しであることを理解する。

赤穂事件と為政者としての武士②

◎浅野旧臣（赤穂浪士）による吉良邸討ち入りは、幕府の為政者としての姿勢に対する武士の警鐘であったことを理解する。

○赤穂浪士は、幕府による刃傷事件の裁定が、喧嘩両成敗の原則を無視し、正式な手続きを踏んでいないことに対して抱いた不満を原因として討ち入りしたことを理解する。

○世論が賞賛する浪士を助命すれば、文治政治の推進者としての将軍自らが1年前に下した裁定の誤り（喧嘩両成敗の原則無視）を認めたことになり、浪士を極刑に処すれば浪士の「忠義」を認めなかったことになるという自己矛盾に陥ったことを理解する。

○自己矛盾が生じた徳川綱吉は、助命論・切腹論・磔獄門論などさまざまな論を唱える幕閣や儒学者・世間の反応を考慮して赤穂浪士に切腹を命じたことを理解する。

V. おわりに

「忠臣蔵」は、「赤穂事件」という歴史事象をもとにした創作脚本であり、さまざまな論に基づいている。それらの論を全て否定することはできず、そのつもりもない。謎に包まれる事件であるからこそさまざまな脚本が作られ、時代を超えて人々に愛されるのである。

また、この事件の根本を流れる「武士の一分」は、間違いなく当時の最高権力者である江戸幕府の将軍の為政者としての姿勢に警鐘を鳴らしている。

本論文では、赤穂浪士の討ち入りを主題として、江戸時代中期の為政者のあり方を考える学習指導案を構成した。指導方法・内容ともに更に改善を重ね、諸批判に耐

えうるものとしていきたい。

参考文献

伊東成郎「忠臣蔵101の謎」新人物往来社 1998年
佐藤孔亮他「古文書で読み解く忠臣蔵」柏書房 2001年
「赤穂義士史料」雄山閣出版 1999年

学習指導案
第1時間目

展開	発問	教授・学習過程	生徒に獲得させたい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・「忠臣蔵」の話を知っていますか？ ・これから、この事件の内容の学習を通じて、江戸時代という時代を勉強しましょう。 	T.発問する P.答える T.説明する T.発問する	<ul style="list-style-type: none"> ・「忠臣蔵」の話は、江戸時代に実際に起こった赤穂事件と呼ばれる実話をもとに、後世の脚本家が、浅野と赤穂浪士を善、吉良を悪とする勧善懲悪の思想を注入して作り上げた創作である。
展開 ①	<ul style="list-style-type: none"> ・「忠臣蔵」の話の概略を学習しましょう。 ・「忠臣蔵」の話に登場する人物を確認しましょう。 ・いつ、誰が、どこで、何をしたのか。 ・では、なぜ現代においても大きな人気を博しているのだろうか。 	T.説明する T.発問する T.説明する T.発問する P.答える T.説明する	<ul style="list-style-type: none"> ・浅野内匠頭長矩，35才，播州赤穂藩主50,000石 ・大石内蔵助良雄，43才，播州赤穂藩筆頭家老 ・吉良上野介義央，61才，高家御指南役旗本，5000石 ・1701年3月14日，江戸城松の廊下で浅野が吉良に刃傷，浅野は即日切腹・改易，吉良はお咎めなし。 ・1702年12月14日，大石を中心とする元赤穂藩士46名が江戸本所吉良邸に押し入り首を取って討ち果たし，泉岳寺の浅野長矩の墓前に供える。 ・事件から約2ヶ月後，討ち入りをした46人全員が切腹。 ○以上のような「忠臣蔵」は，今から300年以上前に起こった事件であるにもかかわらず，脚本化されて語り継がれている。 ・浅野は善，吉良は悪という役回りが定着し，勧善懲悪のストーリーがわかりやすいから。 ・いじめられていたとされる浅野の立場に同情する人が多いから。 ・自分の命をかけてまで亡き藩主の仇を取った大石等浪士らの心意気がすばらしいから。など。 ○実際に赤穂事件を見聞きした当時の人々も，赤穂浪士の討ち入りを「義挙」として賞賛した。
展開 ②	<ul style="list-style-type: none"> ○赤穂事件は本当に「義挙」なのだろうか ・事件の背景を学習しよう。 ・1701年3月14日は，どこで何が行われていたのか。 ・両使はどのような日程で江戸に滞在していたのか。 ・浅野内匠頭は，両使の滞在与どう関わっていたのか。 	T.発問する T.発問する T.説明する T.発問する T.説明する T.発問する T.説明する	<ul style="list-style-type: none"> ・当日は，2日前から江戸に滞在していた朝廷の使節（勅使と院使）が江戸城に登城し，将軍が両使へおみやげを渡し，京都に帰る日だった。事件は両使の到着直前に起こった。 ・前々日の3月12日は，天皇の使いである勅使と，上皇の使いである院使が江戸城に登城し，天皇と上皇の言を将軍（徳川綱吉）に伝えた。 ・前日の3月13日は，江戸城中において，将軍が勅使と院使へ御馳走をしてもてなした。 ・勅使の馳走役（接待役）だった。（院使の接待役は伊達宗春）

展開	発問	教授・学習過程	生徒に獲得させたい知識
	<ul style="list-style-type: none"> ・吉良上野介は、両使の滞在与どう関わっていたのか。 ○浅野はなぜ吉良に斬りかかったのだろう ・この仮説は成立するのか事件直後の二人の証言を見よう ・これらの言葉から何が分かるか。 ・もし、仮説が正しければ、どのような問題が起こるのか ・以上のことからどのようなことが分かるか ・なぜこれ以上のことは分からないのか 	<ul style="list-style-type: none"> T.発問する T.説明する T.発問する P.考える T.説明する T.発問する T.説明する T.発問する P.考える T.説明する T.発問する P.答える T.説明する T.発問する P.答える T.説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・高家筆頭御指南役という役柄で、両使への馳走役を命じられた浅野と伊達の指導役であった。 仮説1「御指南役という立場を利用して吉良が浅野をいじめたため、浅野が吉良を逆恨みした」 ・事件直後に幕府の役人に尋問を受けた浅野が残した言葉 「私は幕府に恨みはないが、吉良には個人的な恨みがある。だから前後を忘れて吉良を討ち果たそうとした。」 ・事件直後に幕府の役人の尋問を受けた吉良が残した言葉 「自分は恨みを受ける覚えはない。浅野の乱心であろう」 ・吉良と浅野の間に何があったのか、実際はよく分からない ・勅使と院使の接待に不行き届きな点があれば、勅使接待役と院使接待役の両名だけではなく、指導役の吉良にも大きな責任が発生する。もちろん不行き届きになるぎりぎりの線でいじめが行われた可能性はあるが、自分の責任となる可能性があるいじめは、行われなかった可能性が高い。 ・また、17年前にも浅野は勅使饗応役に任じられ、役目を果たしているため、浅野やその家臣団が饗応自体に不慣れである理由は考えられない。 ○仮説1は成立する可能性が低い ・浅野が即日切腹となったから。
展開 ③	<ul style="list-style-type: none"> ・大名の即日切腹はこれまで例があるか ・なぜ浅野は即日切腹となったのか ・この裁定の背景には幕府のどのような政治方針が見られるか 	<ul style="list-style-type: none"> T.発問する T.説明する T.発問する T.説明する T.発問する P.答える T.説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・例はなく極めて異例である。 ・京都出身の生母を持ち皇室への崇拜の念が強い綱吉は、生母桂昌院の従一位宣下をめざしていたため、朝廷に対してこの事件のために悪い印象を与えないよう、両使が帰洛する日に裁定を下したと考えられる。 ・目上の人を大切にしようとする文治政治の考え方。

展開	発問	教授・学習過程	生徒に獲得させたい知識
	<ul style="list-style-type: none"> この裁定の手続きはどのようにして行われたか 徳川綱吉自身の政治を振り返ってみよう もし浅野と吉良との間に何かしらの対立があったとした場合、次の行動の理由を考えてみよう この仮説は成立するのか なぜ江戸城中でなくてはならなかったのか 他に恨みを晴らす方法はなかったのか 改易という大きなリスクを冒してまでも、江戸城中で刃傷に及ぶ理由があったのか ○なぜ浅野は吉良に江戸城中で刃傷に及んだのか 	<p>T.発問する T.説明する</p> <p>T.発問する P.答える T.説明する</p> <p>T.発問する T.説明する</p> <p>T.発問する P.答える T.説明する</p> <p>T.発問する P.考える</p> <p>T.発問する P.答える T.説明する</p> <p>T.発問する P.答える</p>	<ul style="list-style-type: none"> 本来の事件の手続きは、事件の発生→犯行者の逮捕→評定衆による裁判→老中会議での審議→將軍への報告→將軍の判決→老中を通じて判決の申し渡し→処罰という道筋で行われるはずであったが、今回の事件は、事件の発生→犯行者の逮捕→側用人柳沢吉保の將軍への注進（報告）→綱吉は老中土屋政直を通じて切腹と改易を申しつける→即日処罰であった。 天下の悪法といわれた「生類憐れみの令」を25年にわたって出し続ける専制的な政治を行った。 <p>仮説2 「いつか恨みを晴らしてやろうと思っていた浅野は、江戸城中松の廊下で吉良と直接会ったことを絶好の機会と考え、すれ違いざまに刃傷に及んだ」</p> <ul style="list-style-type: none"> 大名は江戸城に登城する際、大刀は小姓に預け、脇差しのみを腰に差して歩いた。脇差しといえども、城中で絶対に抜いてはならず、抜けば改易は免れなかった。 幕府の評定所に訴える、將軍に直接訴える、關討ちをかける、果たし合いをするなど。 領地と家臣と自分の命を失ってまで一旗本である吉良を江戸城中で直接成敗するほどの理由はない。 浅野内匠頭は、冷静に状況を判断できないほど短気で直情的な人間だったから。
終結	<ul style="list-style-type: none"> 1701年3月14日の刃傷事件の主な原因は何だったのか 	<p>T.発問する P.答える</p>	<ul style="list-style-type: none"> 対立の有無はともあれ、江戸城中で起こった刃傷事件とその裁定には、徳川綱吉と浅野内匠頭の直情的性格が主な原因として存在した。

第2時間目

展開	発問	教授・学習過程	生徒に獲得させたい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> 赤穂浪士たちは、なぜ吉良邸に討ち入ったのだろう 本当にそうなのだろうか。 	<p>T.発問する P.答える</p>	<ul style="list-style-type: none"> 主君の無念を晴らすため

展開	発問	教授・学習過程	生徒に獲得させたい知識
	他に理由はなかったのか ○赤穂浪士の討ち入りの真の理由は何だったのだろうか	T.発問する	
展開 ①	<ul style="list-style-type: none"> ・浅野内匠頭の家臣であった大石内蔵助らは、事件を知った後、どのような行動を取ったか ・その願いは聞き入れられたか ・彼らが次に取った行動は何か ・調べてみて何が分かったか 	<ul style="list-style-type: none"> T.発問する P.考える T.説明する T.発問する T.説明する T.発問する P.考える T.説明する T.発問する P.答える T.説明する T.説明する T.説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・弟浅野大学の謹慎を解き、藩主として復帰させてくれるよう、お家の再興のために尽力した。 ・お家再興の願いは聞き届けられず、赤穂藩は改易、200人の家臣は浪人となり、城も幕府に明け渡すこととなった。 ・浅野と吉良の間に何があったのかを調べた。 ・浅野の行動にも疑問があったが、吉良の側にも問題がある可能性は否定できなかった。 また、浅野は即日切腹という苛烈な処分が下されたのに対して、吉良は「手向かいをしなかったのは殊勝である」として、一切のお咎めなかったことも分かった。 ・浅野の切腹の理由が、「折柄と申し、殿中を憚らず、理不尽に斬り付け候段、重々不屈き至極…」という理由であったことが分かった。 (このような時期に江戸城中であることも忘れてわけも分からず他人に斬り付けるとは全くもってけしからんやつだ) ・両者に対する正式な取り調べが行われず、裁定の道筋も本来のものとは全く異なっていたこと。
展開 ②	<ul style="list-style-type: none"> ・ここまで考え、大石らは大きな不満を抱くことになった。その不満とはどのような不満なのか。 ・この不満は、何という原則に幕府が反しているという不満なのか ・喧嘩両成敗の原則に反しているということと、自分たちの討ち入りは、どのような関係にあるのか 	<ul style="list-style-type: none"> T.発問する P.答える T.説明する T.発問する P.答える T.発問する P.答える T.説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・「武士どうしの争いであるにもかかわらず、一方的な裁定が幕府によって行われたことに対して不満がある。」 ・喧嘩両成敗 ・幕府が誤った方法と内容の裁定を下したのであるから、吉良にも正しい裁定（切腹）が下されなければならなかった。 主君浅野内匠頭は、本来それをのぞんでいたはずであるから、われわれ赤穂浪士が吉良の命を奪うということが主君の無念を晴らすことになり、誰も文句を言えないはずだ。 ○つまり赤穂浪士は、幕府の裁定を不服として吉良邸に討ち入ったのである。

展開	発問	教授・学習過程	生徒に獲得させたい知識
展開 ③	<ul style="list-style-type: none"> ・討ち入りという行動に対し、当時の人々はどのような反応を示したか ・世間はどうかだったか ・学者たちはどうかだったか ・幕閣はどうかだったか ・将軍はどうかだったか ・最終的な裁定はどうかだったか 	<ul style="list-style-type: none"> T.発問する T.発問する P.答える T.説明する T.発問する P.答える T.説明する T.発問する P.答える T.説明する T.発問する P.答える T.説明する T.発問する P.答える T.説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・（この事件は世間に公表されなかったという説があるが）このような事件は前代未聞であるが、確かに幕府の裁定には疑問がある。浅野内匠頭の無念を晴らした労使たちの行動は賞賛に値する「義拳」である。助命するべきである。 ・林信篤や室鳩巢は義拳として助命を主張したが、荻生徂來はこの事件を徒党を組んだ騒擾と判断し、武士としてのメンツを生かした上で切腹させるべきであると意見し、儒学者たちの間で議論が分かれた。 ・夜中に密かに吉良を襲撃するということは夜盗と何ら変わることはない。磔獄門であるという老中や、赤穂浪士の行動は吉良に対する浅野の無念を晴らすためであり、徒党どころか忠義者と言ってもよいので、いずれ赦免するべきであるといったという意見書を将軍に提出した評定所があり、幕府は対応に苦慮した。 ・綱吉は儒学を好み、文治政治の精神から忠義を大切にしなければならぬと常々考えていたため、助命の方向を考えていたが、一方では、今回の彼らの行動を認めれば、1年前に自分が下した裁定に誤りがあったことを認めることになるため、自分自身の中にある矛盾に苦しんでいた。 ・討ち入りをした46人に切腹を申しつけ、討ち入り当夜赤穂浪士に対して重傷を負いながらも奮戦した吉良上野介義央の後嗣義周に対しては、義央の命を守れなかった不手際を責めて領地召し上げ、信濃に配流という処分を下した。 ○大石ら赤穂浪士は結果的に、自分たちの命に替えて喧嘩両成敗を認めさせることになった。
終結	○この事件の歴史的意義はどこにあるか	T.発問する T.説明する	<ul style="list-style-type: none"> ・武士階級どうしの争いに見えるこの事件では、為政者としての武士が、価値観の変化の中で慎重かつ適切な判断を要求されていたのである。